

ホトトギス同人  
柴原先生×大和田博道氏



対談集

明治三十年に創刊してから、数々の名作を生み出してきた俳句雑誌「ホトトギス」。現在は、俳句界の重鎮、高浜虚子の曾孫である稲畑廣太郎いなばたこうたろうがホトトギス社の主宰を務めています。この俳句の団体の会員のことを「同人」と呼び、この度、足立区で四十七年ぶりに新しいホトトギス同人が二人誕生しました。大和田博道さんと柴原かつ子さんです。どちらもホトトギス同人の柴原保佳先生の下で学ばれました。柴原先生は、舎人地域学習センターで活動中のとねり俳句会の講師でもあり、高浜虚子氏に師事を受けていたこともありました。大和田さんは、柴原先生の下で三十年俳句を学び、投句を続ける熱心な方です。大和田さんは、舎人住区センターで働いていたこともあるので、ご存知の方も多いのではないのでしょうか。かつ子さんは、柴原先生のご夫人で、三十年近く投句を続けてきたことが評価されました。

— ホトトギス同人に選ばれたときにどのようなお気持ちだったのでしょうか。

大和田 本当にホトトギス同人に選ばれるとは思っておりませんでした。これは本当に良い先生である柴原保佳先生に師事できたので、その賜物としてホトトギス同人になれたのではないかと思っております。

柴原 大和田さんを知ったのはあだち俳壇が始まり

です。最初であれば普通は、はがき一枚か二枚程度ですが、大和田さんは毎月三十枚も作った俳句をどんどん送っていました。あだち俳壇のはがき百五十枚中、二、三十枚は大和田さんでした。辞めないで熱心に作るということ、作り続けるということが大事ですね。本当に魂の入った熱心な投句者でした。そのような今までの実績が評価されて、ホトトギスの入会者になっても、作る俳句は良いもので目立っていました。そういったことも評価されて今回のホトトギス同人に選ばれることに繋がったのでしょう。私の弟子であることも同人推薦の一つになったと思います。何より本人が熱心で、ホトトギス主催の廣太郎先生などの目に止まってめでたく同人にな

られました。また、私の父親の友人にもあたるためなり為成しやうぶえん菖蒲園先生もホトトギス同人でした。

大和田 この人が足立区で初めてのホトトギス同人ですね。その次が柴原保佳先生。そして三人目と四人目が私と保佳先生の奥さまですね。

柴原 正確に言うともう一人いるんですよ。NHKの元職員の阪西敦子さんです。足立区ではこの五人です。

— 大和田さんが最初に俳句を作ったのはいつ頃、どのような時でしたか？

大和田 最初に俳句を作ったのは、今のあだち俳壇に投句したのがきっかけです。たまたまあだち俳壇を見まして、「私も出してみようかな」と思ったんで

す。その時、ちょうど庭に椿が咲いていたので椿で一句書いて出してみました。そうしたら、それが入選しました。やる気も何もなく、とりあえず投句した一句が入選したんです。翌月にこれもまたちょうど咲いていた梅を題に一句作り投句したところそれも入選した。このことがきっかけでそれからずっと俳句を続けています。

本当に全く興味がなくて、たまたま俳句に出会って始めたんです。それからずっと先生のところに投句して、だんだん熱があがっていきました。初めは一句しかできませんでしたが、結果的には、はがき二、三十枚まで投句するようになりましたね。



大和田博道さん

— 柴原先生に出会うまでの七年間は独学で俳句を作っていたと聞きました。

大和田 独学でやっていました。独学とはいってもまったく勉強はしないで、歳時記もなしにただただ作っては投句、を続けていました。色々な方の句を見ながらひたすら作っていましたね。

柴原 歳時記なしで俳句をつくっていたことがすごい。歳時記というのは船で言えば羅針盤の役割。羅針盤を持たず、自分で学んで感性を磨いた。私は大和田さんのそういうところを評価しています。

これはただ者ではないぞ、と。本気になっている人だとそう思いましたね。やっぱりそういう心にはうたれます。師匠であればその心はわかりますから、やる気があるかないか、熱がこもっているかどうかというのには。

大和田 句会で柴原先生とお会いして習うようになってから、いい句ができるようになったと実感しています。

— 俳句を始めて、変わったことはありませんか？

大和田 得したことがありません。まず、自分が豊かになったように感じます。例えば、散歩をしても俳句を始める前は、道端のちよとした草花なんかは全然自分に関係なかった。でも、同じ散歩でも俳句を始めてからは周りが豊かに見えるんです。なんでもないことがとても良く、景色が違って見える。以前は“良い天気”というのは雨が降らない日本晴れの日のことでしたが、今は雨が降っても良い天気、風が

吹いても、雪が降っても良い天気だと感じるようになりました。変化がない日よりその方が特別な句が作れるからです。だから、雨も雷も風も雪も大好きです。そのように変わりましたね。

柴原 雨が降ったからといって句会を中止にするとはありません。そういうときの方が良い句ができたりします。梅雨時の雨ばかり降っている時期は嫌だなあ、と思うかもしれないけれど、木は水分をたっぷり蓄えて生き生きしていますよね。そう考えると緑が美しくて素晴らしい季節だと思えるんですよ。

大和田 なんでもない平凡な日々でも俳句をやっていると豊かになります。歩いているだけでもたくさんが見ることができる。多くの人にこのことを体感してもらいたいですね。俳句は下手でも良いんです。

大和田 俳句ができない人はいません。ただ始めたり、会や教室に入る勇氣があるかないかだけの違いです。上手に作る気を持たず、下手でも良いから最初の一步、一句を踏み出す。上手に作ろう作ろうと思っていると不思議なもので良い句ができないんですよ。

柴原 だから子どもが良い句を作るんです。素材で何も考えない、思ったまま言葉を並べて邪念が入らないから素晴らしい句ができます。そういう気持ちで、考えすぎず見たままを、感じたまま作ることが大切ですね。

— 柴原先生の傘寿記念に発行された合同句集の「扇」。発行への想いや今後の活動などを教えてください。

大和田 今回、柴原先生の傘寿記念の合同句集「扇」は、先生に俳句を習っている約八十人もの人が俳句をやっている年月関係なく一人あたり二十句が掲載されています。これだけ多くの人が喜んで句を考え、作ったのは先生の人柄が大きいでしょう。冊子として発行することができ、足立区の図書館には全館で所蔵がある。とても嬉しいことですね。

柴原 このように、活字にしてもらえる嬉しさというものもとても大きいものですね。昔はよっぽど良い句で、有名にならないと活字になって残っていか



柴原保佳先生

った。それが今では冊子として残せていけるなんて、とても嬉しいことです。

大和田 活字になるということは素晴らしいことです。自分の言葉が活字になるなんて、そんな嬉しいことはないですからね。そういった意味でも、とても貴重で大切な一冊になっています。今後も定期的に句集を発行していく予定です。第二号は年明けくらいに発行できたら良いと考えています。

—高浜虚子先生との出会いはどのようなものでしたか？

**柴原** 父親が俳人になったとき、昭和二十七年に毎日新聞で全国特選の募集があつて、父親がそれに応募しました。募集は「海や山の部」や「海浜の部」、「建造物の部」など色々な分野に分かれていましたが、その中でも父は「建造物の部」に山形県の出羽三山の三山神社の神殿を詠んだ句を応募し、入選しました。「月明かし 世をしろしめす 神ここ」という句が全国特選に選ばれました。賞金として二十万円という大金がもたらえることになりました。

昭和二十七年は普通のお嬢さんが働いて月七、八千円もらう時代でしたから、二十万円は非常に大金です。

本当にお金持ちになった気分でした。喜んで辞書を五、六冊買いました。その頃は、戦後で出版の状況もあまり良くないため、辞書が高く、大言海や広辞苑など、伝統的で歴史ある辞書はなかなか買えず、

一冊が五千円くらいしました。今でも同じくらいの値段だけど、その時代の五千円がいかに高いか。その賞金の二十万を当時私が角帽をかぶって取りに行つたんですよ。

父親は商人ですから、地方歩きをしていて自分が入選したことなんて知りませんでした。地方のどこかで教えてくれる人がいて、知り、家へ電話をしました。「賞金は取りに行けないからお前(柴原先生)が行つてこい」と言われ、毎日新聞に恐る恐る行つたわけです。そこには、入賞した(特選ではないが)為成菖蒲園先生もいました。昔から良くしてもらっていたから、自分に付き添つてくれ、入賞者が集まる控え室で成瀬正俊さんに紹介してもらつたんです。彼は犬山城の城主である人間でしたが、学習院の学生で、色の黒いすらつとした今で言う「イケメン」な男でした。犬山城を個人所有している殿様でそれは有名な方でした。

当時、俳句をやる若いものは星野立子という先生についていましたが、その方は虚子先生の二番目の娘さんでした。会でみんな星野先生に教わつていましたが、私もそこに誘われました。私は悩み、高校の先生に相談をしました。先生からは「人生にはチャンスというものはそんなにあるものではない。そういうチャンスは絶対に逃さないで、どんなことをしてでも行きなさい。」という言葉で背中を押してくれたのです。

その言葉があり、私は会に参加し星野先生の下で学

ぶようになりました。そこで私は初めて星野先生が虚子先生の娘であることを知りました。

その当時の虚子先生は現在の私くらいの年齢ですから、できるだけ若い人に会わせたいと星野先生は思っていました。人間は人に会うだけで良い。五行説を聞いたり、一緒に何かをするというのはもちろん良いことだけど、会うだけ、顔を見合わせるだけでもすごい影響力があるんですよ、特に会つただけで感動するような、輝いているカリスマ性を持った人には。それは時代に関係なく今でも言えることです。

そのような経緯で、星野先生を介して、虚子先生と直にお会いしました。これは人生の中でも自分の力ではなく、本当に巡り合わせだと思っています。ラッキーだったんです。会に参加するかどうか迷つていたときに学校の先生に「絶対に行きなさい」と背中を押されなかつたら、私も怠け者で野球ばかりやつていましたから、きっと会には参加せずじやう。

**大和田** 今の柴原先生のお話の通り、何かお話をいただいたら、自分が少し背伸びしないと届かないような内容でもキャンセルしないで挑戦してみる。それが人生で一番大事だと思つています。そこでの出会いや経験は自分の為になります。

**柴原** その時は、大事さはわからないものです。アドバイスをする人がいて初めて動くことができたります。後から見るとあんなに大きなチャンス、と思うことでも当時はどうしようかな、と迷つていたんで

すから。

—高浜虚子先生に出会ってから生活はどのようなものでしたか？

**柴原** 昭和二十七年に千葉県鹿野山というところ、ここは昔飼っていた虎が網を破って逃げ出し、大騒ぎになったことがある山で知っている人も多いのではないかと思います。この山に神野寺というお寺があります。

その和尚さんが神野寺を俳句の修行場として虚子先生を通じて私たち(弟子たち)に開放していただいています。その和尚さんも虚子先生のお弟子さんのひとりでした。神野寺で夜も寝ないで毎日俳句を作ったものです。弟子のみんながひとつの部屋にお寺の薄い布団をひいて暮らしていて、夜中になるとあちらこちらで懐中電灯の光が点き始めるんです。

**大和田** 俳句を思いついたらすぐに書いておかないと忘れてしまうからですね。みんな夜寝るときも俳句のことを考え、作っていますから。

**柴原** みんな俳句を作りにお寺に集まっていますから。俳句以外のことはほとんどやりませんでした。

たまにお寺にあつた。ピンポン台で遊んだくらいです。  
**大和田** 俳句の世界で有名なのはまず松尾芭蕉です。すよね。みなさん知っていると思います。それに与謝蕪村、小林一茶、それから明治に入って正岡子規、

高浜虚子。江戸時代から今現在まで考えても日本

を代表する俳人はこの五人だと思います。教科書にも必ず出てくる人物です。この中に名前が挙がるような高浜虚子先生に柴原先生が師事し、私がその柴原先生に師事している。この時代を超えたつながりが本当にすごいことだと感じています。

—高浜虚子先生は厳しく指導される方でしたか？

**柴原** 先生にとって私たちは孫のような年齢でしたから、そんなに厳しい指導はありませんでした。しかし、私の少し上の世代の人たちは厳しく指導されていた方々もいますね。例えば、山口青邨、水原秋桜子、山口誓子、高野素十。この方々がホトトギスの4Sと呼ばれる人たちです。

**大和田** 阿波野青畝(あわのせいほ)という人もいますね。その方を含めると五人です。この方々が虚子先生のお弟子さんの中では有名な俳人たちです。

**柴原** 4Sを有名にしたのが青邨ですね。講演会などで「ホトトギスにはこんなすごい俳人がいて、盛り上がっている」ということを世に伝えた人物なんです。

**大和田** 4Sは「セイシ」「シユウオウシ」「セイホ」「スジユウ」と全員名前にSが入る。同じくSの音を持つ「セイソク」先生もその四人と遜色なく肩を並べる実力を持っていた方でしたが、自分のことは卑下し、他の四人をたてていた。自分を含めて5Sとはしなかつ

たんですね。

**柴原** 後に私は青邨先生を車で送り迎えをしましたが、その時に「先生は4Sとしていますが、私は先生を入れて5Sだと思っています。」と直接伝えたいこともあります。

**大和田** 俳句で有名なのは江戸時代から五人と挙げましたが(前号に掲載している松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規、高浜虚子)、私から言わせるとまず、松尾芭蕉と高浜虚子が俳句界で名を残した中でずば抜けて素晴らしい実力を持っている方だと思います。若いうちから始めて長生きしたこともありますし、職業として俳句を書いていた人たちですから残した俳句も他の俳人と比べて桁違いに多いですよ。本当に素晴らしい先輩たちです。



―俳句の基本とはどのようなものですか？

**柴原** まず俳句には季語を入れること。そして、五・七・五の音におさめること。十七文字、というよりは十七音におさめることです。今は字余りなども多少認められますが、基本はこの二つですね。

**大和田**やはり俳句の場合、基本は崩さず五・七・五におさめるのが良いでしょう。字余りや字足らずという形には本当に上手になってから挑戦するのが良いでしょう。最初から挑戦すると上手になれないです。

―慣れてきたら自然と季語は句の中に入れられるようになるんですか？それとも季語を考えて句を作っていくのでしょうか。

**大和田**例えば先生が指導している「とねり俳句会」での活動では、題が出て、それに沿って句を作っていきますね。即興で作る場合もちろんあります。舎人公園で作る、とか句会で句を作つて発表する、とか。そういう場合には自分の目で見たものをその場で句にするので、季語も自然と入ってきます。

**柴原**こちらが与えるのではなく、実際に景色を見てその中にある季語を自分で探すわけですね。

**大和田**先日、日本伝統俳句協会の総会がありました。柴原先生の句が特選をとりました。

**柴原**ちょうどワールドカップで日本が負けた日でしたので、「サッカーは負け 暑に負けず 総会へ」という句をよみました。サッカーが気になって携帯ラジオで試合の状況を聞いていたんですね。日本が負け

た瞬間に思い浮かびました。その時、たまたま書くものを持つておらず、大和田さんから鉛筆を借りて書き記した一句です。

**大和田**その句が特選です。やはり、俳句は即興で作るのが基本なんでしょうね。ぱつと目に入ったもの、見たもの、思い浮かんだものを句にするのが良いのでしょう。

―お二人は月にどのくらいの数の句を作られているのでしょうか。

**大和田** 色々なところに投句していますからね、月に百句くらいは作っています。

**柴原**私は教室もたくさん持っていますので、二百句程度でしょうか。一つの教室で二十句くらいは作ります。

―この対談を読んで、これから俳句を始めてみたいと考えている方は、どのように行動していけば良いのでしょうか？

**柴原**俳句を作る方は評論家になつてはいけませんね。評論するのなら、まずはとにかく作つてみる。考えることは大事ですが、実際に句をつくらず評論ばかりしては本当の俳人にはなれないと思えます。自分の感性や知識を習得しながら俳句を作っていく。これは、相撲に通ずるところがある、と思つています。相撲は土俵にあがったら一つ一つ考えながら取り組むことはできません。場数をふみながら体で覚えていくことが多いでしょう。俳句も同じで、数

を作っていくことで感性も育っていくのです。

**大和田**初めての方が入る俳句のコミュニティの一つとして適しているのが舎人地域学習センターで活動している「とねり俳句会」(指導者:柴原先生)ですね。

**柴原**初めての方にはとにかく俳句を作ってもらふことにしています。ちよつとでも良いところがあればそこを拾っていきます。初心者でも良い点がたくさんあるのだから、良いところを認めて伸ばしていきます。常にそういう気持ちで指導にあたっています。

**大和田**何度もお伝えするようですが、下手でも良いんですよ、俳句は。上手に作る気になると上手にならないものです。見たそのままを作る、そういう人は自然と上手な句が作れるようになりますね。



―傘寿記念合同句集「扇」を発行するにあたって大変なことはありませんか？

**大和田** 大変な作業でした。特に校正が大変で、何回やつても訂正するところが出てくる状態でした。これは我々の汗の結晶です。出来上がったときは本当に嬉しかったです。作成したのはほとんど足立区の方です。

**柴原** 八十人くらいあつという間に集まりましたね。

大事な一冊です。みんな私の可愛い弟子ばかりですからね。義理で出す人は一人もいない。

**大和田** 図書館の本としてもこれから残っていきますね。何十年も残る非常に貴重な冊子となりました。

今後発行するにあたってこの記事を見た方の句が載ると良いですよ。俳句はどなたでもできます。やれば人生が変わりますよ。

**柴原** 前頭葉を使うため、老化も防ぎます。

**大和田** 「とねり俳句会」も柴原先生のような素晴らしい先生を迎えることができるともよかったです。まず、「とねり俳句会」の活動に参加してみるのはどうでしょうか。難しいことは、何もありませんから。

**柴原** 気楽に、お茶でも飲みながらね。

**大和田** 俳句は難しいことを考えないで見たもの、感じたものを文字にすれば良いのです。(窓を指差しながら)今だったら風が吹いているでしょう。それに季題を入れれば良いのですから。例えばもつと風が強く吹けば「青嵐」という季語になります。あとはそれに七

・五をつければ完成です。季題は必ず普段の生活で見つかります。俳句は気楽に始めることができます。始めた人は良い人生を送ることができます。ぜひ、みなさんに俳句の世界に足を踏み入れて欲しいです。―  
**柴原先生、大和田さん、貴重なお話をありがとうございました！**

## 扇句会 合同句集

### 柴原保佳傘寿記念号

### ☆足立区の図書館

全館で所蔵があります。

☆表紙の「扇」の文字は柴原



## とねり俳句会

講師: 柴原保佳

活動日時: 月1回 第1金曜日 午後1時30分～4時

入会金: なし 月会費: 1,500円

柴原先生から一言

俳句はどなたでも出来る庶民の文芸です。難しく考えれば確かに難しいですが、俳句を作る為の季題はどこにでも転がっているのです。台所で大根をすってみても季題になります。何でも季題として取り上げることが出来るのです。皆さんもこぞって俳句を作りましょう！

命は短いけれど、文芸は命を超えて残ります。その力を知って一緒に俳句を作りましょう。

発 行／舎人地域学習センター・舎人図書館

発行所／〒121-0831 東京都足立区舎人 1-3-26

舎人地域学習センター TEL03-3857-0008

舎人図書館 TEL03-3857-0771

Mail tonerilcc-ys@bb.wakwak.com

責 任／ヤオキン商事株式会社